カフカの物語『歌姫ヨゼフィーネあるいは鼠の族』について

高木久雄

カフカはM・ブロート宛の遺書のなかで、二度にわたって、遺品中、日記・原稿・書簡などすべてを焼却することを命じ「僕が書いたすべてのもののうちで、残してもかまわないものは次の本だ。『死刑宣告』『火夫』『変身』『流刑地』『田舎医師』、それに物語『断食行者』。以上の五冊と物語とを残してもかまわないと云ったのは、増刷して将来に伝えてもらいたいつもりではなく、逆に全く失われてしまったならば、それが僕のほんとうの願いにかなうことなのだ」と述べ、これがかれの最後の意志であることを明らかにしている。

一方、カフカはかれが死んだ年(一九二四)に書きあげた最後の物語『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは鼠の族』――(以後たんに『ヨゼフィーネ』とよぶことにする)――と、一九二一―二四年のあいだに書いたと推定される『最後の悩み』『小さい女』『断食行者』の四篇を一冊にまとめて『断食行者』という書名でベルリンの「シュミーデ」社より出版しようとしていた。その校正刷り初校は、カフカが死の病床にあって読んだもので、以後の校正はブロートの手によっておこなわれた。カフカの愛人ドーラとともに最後迄カフカの病床につきそった医師

R・クロップシュトックの伝えるところによれば、カフカは死の前日、届いたばかりの『断食行者』の初校を見た。短篇のならべ方を変えるためにいろいろと指示を与えながら、かねてこれこれの指示をしておいたにもかかわらず、出版屋が十分念をいれてやってくれない、といって機嫌を悪くしていた、ということである。

このふたつの事実から、カフカ研究でさけて通ることのできない、あの遺言書の真意をさぐって見ることは、カフカ文学を理解するうえに重要である。カフカのあのブロートへの頼みは真剣なものであったのか、それともかれの心のアムビィヴァレンツを示すものなのか。もしここで、カフカ自身の芸術的な評価と決定がおこなわれたとすれば、三大長篇『アメリカ』『審判』『城』およびその他遺稿のなかの多くの作品やアフォリズムは、カフカのセレクションからはもれたことになる。その意味でも、カフカが遺稿の焼却を命じた委任状は、カフカ研究にとって無視できないものなのだが、このような問題を背景におきながら、カフカの最後の作品となった物語『ヨゼフィーネ』(これは『断食行者』という書物の最後を飾っている)について、若干の考察をくわえてみることにする。

× × ×

この作品は、ねずみ族のプリマドンナ、ヨゼフィーネに関する物語で、これを語っているのは、その種族の民衆のひとりである。主人公はヨゼフィーネではあるが、民衆もそれに匹敵するほどの比重をもっている。同じ一冊に収められた他の三篇『最初の悩み』『小さい女』『断食行者』では、それぞれ「曲芸師と興業主」「小さい女と私」「断食芸人と観客」が登場し、「両者の関係が作品の主題になっているが、やはりどちらかと云えば前者のほうに重点がおかれている。ところが『ヨゼフィーネ』では、彼女とその種族の民衆との両方に同じ比重をか

けようとする意図がはっきりしている。ブロートの伝えるところによると、カフカは死の数週間前にこの作品に手を入れながら、筆談で（かれはできるだけ話をしないように医者に命じられていた）次のように語った。「物語に新しい題をつけた。『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは鼠の族』というのだ。このあるいはのついた題名は、あまりかっこうのいいものではないが、この場合にかぎって特別な意義をもっているかもしれない。どこか天秤（ばらんす）を思わせるものがあるからね。」

さて、この物語では、ねずみ族に属するすべてのものが無意識で歌っているちゅうちゅうという鳴き声と少しも異なるところのない、このプリマドンナの歌が、なぜその民衆に魅力を持ちうるか、という問いが主題となる。物語のはじめの三分の二ほどは、この問を中心にして、ヨゼフィーネの歌のこと、それを聞く民衆のこと、この種族の特性、生活状況、歴史などを、相互に関連させながら推理方式で、その解答を追求していく。その場合カフカはつねに、中心的な主題から派生した種々の問題をつぎからつぎへとくり出し、それに解答を与えては、またその解答に対する反論をあげる。問いと答えと反論とが、きわめてヴァラエティにとんだやり方で提示され、どれも決定的なエレメントとはならないが、水ももらさぬ慎重さで検討され穿鑿されていく。そのため、語り手の想像と瞑想と論理とが、この作品のメディウムのはたらきをなし、読者は語り手とともにこのカフカの虚構の世界へとひきこまれていく。このばあい、きわめて謎めいたことをきわめて素朴なやりかたで示すのがカフカの手法であるが、ひとは、この物語を読みはじめてしばらくのあいだは、それが人間のことを書いているのではないということに少しも気づかないほどである。カフカの夢と幻想が、「認識の母胎である経験、まだ規制されていない経験のメディアとなる」のだが、そのメディアのなかで読者を動かしていくものは、謎めかしさが与える衝撃であり、問い、答え、反論という様式がつくりだすディアレクティックな動きである。カフカの幻想の世界

と、夢の世界との類似は、すでに十分に指摘されてきた。『審判』では、主人公が奇蹟によって幻想の世界へと運ばれ、すべてが主人公の視点から見られ、感じられ、考えられていくのだが、『城』では、この手法は、さらに徹底しており、主人公自身が幻想と化している。この動物物語①『ヨゼフィーネ』では、人間と動物との対置という形式ではなくて、『巣』(„Der Bau" 1923)『或る犬の回想』(„Forschungen eines Hundes" 1919/24) と同様に、すべてが動物の世界のなかだけでおこなわれるのだが、語り手が、ねずみ族の民衆のひとりというかたちをとっているため、伝説風な、年代史風な物語となっている。

× × ×

歌としては少しも非凡ではなく、われわれ種族の鳴くちゅうちゅうと全然かわらないヨゼフィーネの歌の魅力の秘密を探るために、まずこの種族の大昔からの伝統的な歌謡芸術との比較をこころみるのだが、彼女の歌はそのような伝統とはおよそ縁のないものである。次に彼女の歌がただのちゅうちゅうとは異なるものであることを知るためには、彼女をきくだけでなく見ることが必要であることが指摘される。「ここには、すでに、ただのあたりまえなことをするのに、わざわざ勿体ぶったまねをするという異常さがある」しかも、このあたりまえなことが聴衆を集め、その意図が成功するとすれば、そこには「芸術の本来の姿」が示されていることになる。そこで、「われわれを恍惚とさせるものは、いったい彼女の歌なのか、それともむしろ、あの弱々しい歌声をとりまいている仰々しい静けさなのか」という問いが発せられる。しかしとにかく、ヨゼフィーネが「なよやかな姿で、とりわけ胸したを不安げにうちふるわせながら、あらんかぎりのちからをこめて」歌うとき、「あの女はちゅうちゅう囀りさえできやしないのにさ。……あんなお国ぶりのありきたりのちゅうちゅうを少しばかり絞りだすの

に、おっそろしくたいそうな恰好をしてみせてさ」という印象しかうけていないわれわれ反対派すら、すぐに「大衆の心にひたりこみ、ぬくぬくと身体をすりあわせ、息をこらしてじっと耳をかたむけるのである。」

「カフカの全作品はしぐさの法典である」と述べたのは、すぐれたカフカ論を書いたW・ベンヤミンであったが、われわれはこの物語でもいたるところでヨゼフィーネの身ぶりの描写に出会う。歌そのものはなんのへんてつもないちゅうちゅうであるのに、身ぶりだけがへんにおおげさで、じだいがかつたものであるために、その身ぶりは一層空虚であり、奇抜であり滑稽でさえある。しかもそれがあたかも「芸術の本来の姿」であるかのように演出され、彼女の歌に魅力をあたえている。そうなると、芸術にとって附随的な要素、ここでは歌う身ぶりとか、歌う時と場所と雰囲気といったものが、彼女の芸術にとって重要な役割をはたしていることになる。そしてこのような彼女の歌に魅力を感ずる民衆と、ヨゼフィーネとはどんな関係にあるかが考察される。

　この種族の民衆は、ヨゼフィーネにたいして、保護者として父親気どりである。ところが、彼女のほうではまったく反対の意見をもっている。すなわち、ヨゼフィーネは、「自分のほうこそ民衆を守る存在だ」と信じている。しかし彼女は「およそくちをきくことはない」のだから「きらきら光る彼女のまなざしと、きりっと結んだくちもとからそれを読みとる」以外にしかたがない。そしてそのあとは、彼女の歌が民衆に救いをもたらすことをなんとか裏づけしようとして穿鑿が続けられるのだが、たしかな証拠は得られない。この場合、物語をひきのばしていくのは事件ではなく、推理である。時間と認識の面で、つねに錯綜しながら、のろのろと進行していくのがカフカのフィクションには典型的なのだが、読者は退屈し圧迫される。なにかあることが主張されても、それにはかならずといっていいくらい、断り書と条件文が添えられていて、きめ手になるような事実とか考察はなにひとつ得られない。記述は精密で、スタイルは細やかであるのに、むやみに固苦しいだけでなんの役にもたた

ない探索と、足踏みした推理と手引きとがあるだけである。そしてこのような論理の渋滞をさけるように、物語は、ねずみ族の特性や生き方や歴史へと移行し、そこからヨゼフィーネの歌の民衆への影響力を解明しようとする。

この種族の生活状態については、すでに、物語の最初の部分で「われわれの生活は苦しいのだから、もういっそのこと日々の苦労はなにもかも振りすててしまおうとする日がいつかくるとしても……」といった調子でふれられており、それが折にふれてくり返されることによって、物語全体に沈痛なひびきを与え、苦難の途をかりたてられていく種族の宿命的な暗さを印象づけている。「われわれの生活は不安定だ。毎日のように、思いもかけぬことや、もろもろの心配事や、希望や恐怖がおそいかかってくる。同胞の支持を常時昼となく夜となく期待するわけにはいかないが、こうしたすべてを、ひとりではとても負いきれるものではない。たといそのような支持があったとしても、本当にやりきれなくなることがしばしばだ。もともとたったひとりのためにさだめられた重荷のしたで、何千というひとびとがふるえおののいていることさえあるのだ」このような種族といえば、ただちに、カフカの属していたユダヤ民族のことが想起されてくる。じじつ、このあとにつづく、この種族の特性の叙述からみても、それがユダヤ人のことをさしているように思われるふしがたぶんにある。しかし、この種族がユダヤ民族であると断定して、この物語全体をその観点からのみ眺めていくならば、この物語の世界を歪めるか、あるいは、それから遠ざかるという結果をまねくことになる。やはりこの種族はなによりもまず、ねずみ族のことであり、ねずみのちょこちょこした動きとか、こまかな習性や生態にいたるまで、カフカはなにひとつ見逃さずに軽妙なタッチで描写している。しかしそれが、われわれが現実に見る、兇悪で、恐ろしいねずみの姿ではなく、カフカの物語の世界のもつ独特な媒質のなかに写しだされるために、ユウモラスで、おもわず笑いをさそう

ようなひとこまとなっている。

この種族にとって一番特徴的なことは、かれらが青春というものを知らないことである。その原因は、かれらの異常にさかんな繁殖力にある。かれらは子供でいるひまがない。つぎからつぎに大量生産される子孫のために、はやくから一人前になって烈しい生存競争の波のなかにまきこまれる。だから十分満たされなかった子供っぽさが、この種族の性質のなかに残滓のようにひそんでいる。一方では、青春がなくて大人の時代があまりに長いために、かれらはまた同時に早老でもある。「そこから大きく尾をひいて、ある種の希望のなさと倦怠感が、概して強靱で執念深いわれわれ種族の本質をつらぬいている」このような種族には「音楽の昂奮、音楽の飛翔」は適していない。ごく若い連中は、ヨゼフィーネのいまにも絶えいるばかりの歌い方を、讃嘆してみつめている。しかし「本来の大衆はいちはやく自己をとりもどしている」かれらが毎日の激しい戦いに疲れた身体を「民衆の大きなベッドに」のびのびとよこたえながら見る夢のなかに、ときおりヨゼフィーネのちゅうちゅうがひびいてくる。だから結局彼女の歌は、民衆を日常生活の束縛からしばらくの間でも解放するのに役立つにすぎない。「ヨゼフィーネがどれほど自らを主張しようとも、彼女の声も、その成功も無にひとしいことは厳然たる事実であり、ヨゼフィーネはただわれわれとの心の通い路をひらくものにすぎない」ここには、自らは芸術的であると信じている彼女の歌が、なんのなかみもない形骸にすぎないことがばくろされている。それは日常の生活からの解放という役割しかもたない、まったく機能化された芸術にほかならない。しかも、ヨゼフィーネが自分の歌の魅力をさらに高め「彼女の芸術が公然とはっきり認められ、時代をこえて生き続ける」ことを願い、日常の労働を免除してもらって芸術に専念したいという要求を示すのにたいして、民衆は「裁判官のような冷たい態度」でその要求を拒否する。ヨゼフィーネはあらゆる手段を使って、この要求のために戦う。敗退していくのは当然で

ある。彼女は自分の歌が機能的な意味しか持ちえないことを知らずに、まったく逆の方向に、すなわち永遠の芸術のために戦っているのだから。現実の生活から解放された、純粋な芸術などというものはすでに可能性としても存在していないのである。

彼女は「どんな恥知らずな手段に訴えても」その要求をかちとろうとする。はじめからありもしないコロラチューレを省略するとおどしてみたり、跛をひいてみたり、芝居をうったりするときの彼女の姿は、コミカルな感じをとおりこしてグロテスクですらある。彼女が歌うときは「いつも拡げられる腕が、身体の脇にだらりと垂れさがり、それがまるで腕がすこし短かすぎるのではないかといった印象をあたえる――こうして彼女が歌いはじめようとすると、またしてもうまくいかない。頭の不機嫌そうな動きがそれを示しており、彼女はわれわれの眼の前でくずれおちる」これは無意味なものに解体したヨゼフィーネのグロテスクな姿であり、カフカの形象に特有な、マリオネットと化した生物の動きである。

かくてヨゼフィーネは民衆との戦いに敗れて姿を消す。「それはわれわれ種族の永遠の歴史におけるささやかなエピソードであり、民衆はその損失にうち勝つだろう」しかも語り手はこの両者のいずれにも軍配をあげていない。むしろ物語の最後では、ヨゼフィーネにわれわれ種族の英雄の席を与えている。「自らの手で歌と縁を断ち、自らの手で、ひとびとの心を支配した自らの力をうちこわした」彼女の悲しい運命にたいして、この語り手はけっして絶望していない。いやむしろ、きわめて冷徹な語調のなかにも、ヨゼフィーネにたいするやさしい心づかいが感じられる。彼女の歌は、すくなくとも、民衆の心のなかに思い出としては生きている。その歌をかれはつぎのように表現している。「ここには、あわれな、はかない幼い日々の何かがある。失われて二度とふたたび訪れぬ幸福の何かがある。しかしまた、現在の毎日の生活の何かがここにはある。あのささやかな、とらえに

くいけれども、つねに存続して、けっして滅ぼすことのできない、いきいきとした悦びがある」

× × ×

物語『ヨゼフィーネ』に関する解釈はいくつかあるが、それは、この作品の主題を「ユダヤ民族とユダヤの宗教」とするものと、「芸術家と大衆の問題」とするものとのふたつに大別される。

M・ブロート《追い立てられたよるべなき鼠の群の描写が、どの民族ともっとも近い関係を持っているかは、あらためて言明する必要もあるまい。民族のもっとも深い窮迫の中にあってスターや、文士や、指導的「人物」の虚栄心がすこしも衰えを見せていないところは、遺憾ながらユダヤの政界文壇に特にしばしば見られる型の人間を彷彿させるのである。……よるべなき鼠の状態は同時に悪の魔性と戦う人類の状態である。……それはいわば、人類の一般に共通する苦悩を特に精密に写した肖像画であり、またその苦悩を戯画風に説明した象徴である》この解釈の特色は、鼠の種族をユダヤ民族とおきかえ、歌姫ヨゼフィーネを悪の魔性とおきかえていることである。(Brod, Max: Franz Kafka, eine Biographie 1937)

H・タウバー《民衆にはヨゼフィーネの歌は全然理解できない。民衆が彼女の声を理解できるためには、彼女のほうで民衆に自身を理解させようとするときに限られる。このことは、神の声を正しく聞きとれるか否かは、ひとえに、神の側からの恩寵いかんにかかっている、という神学的な思弁を反映している》この解釈の特色は、ヨゼフィーネの声を、神の声によっておきかえていることである。(Tauber, Herbert: Franz Kafka 1941)

G・アンダース《カフカは彼の作品を、ユダヤ神学の論文として起草したのではなかったことは、不思議なことにあまり知られてはいないが非常に美しい物語『ヨゼフィーネ』からも証明される。この物語のなかでカフカは、ユダヤ教をユダヤ民族の歴史のなかでのひとつのエピソードとしてえがいている。……この物語は、カフカがユダヤ的運命の宗教的叙述家ではあったが、ユダヤ教にたいしては批判的な態度をとっており、彼女の声をひとつの間奏曲と見なしていたことの、決定的なうらづけとなっている》この解釈では、ヨゼフィーネの声がユダヤ教によっておきかえられている。

(Anders, Günther : Franz Kafka pro et contra 1951)

W・エムリッヒ《歌姫と民衆とのあいだの正しいつりあいが、この物語のテーマであるが、……カフカはここで、ただ芸術であろうと欲するために没落していく芸術、高尚な世界を代表していると信じ、自己を低俗なものと比べることを許さないような芸術にたいして、最終的に清算をおこなっている。……カフカによって芸術は、その本来の意味へと還元されるのである。即ち、芸術は、すべてのひとがちゅうちゅう鳴いているのと同じちゅうちゅうをやっているに過ぎないと。その点で、芸術は分に安んじなくてはならない。……天才の時代以来、芸術に与えられた「例外的な地位」は終りをつげた》(Emrich, Wilhelm : Franz Kafka 1958)

H・リッヒター《この比喩的な形象化のなかに、現在の市民社会での芸術の状況に対するカフカの究極的な言葉が含まれている。芸術は人生になにも与えることができないが故に滅びようとしている。芸術にのこされた唯一の機能は、しばらくの間でも安堵と安心と団結を可能にしてくれる、集団的催眠状態をつくりだすことにある。だから芸術家は、民衆の生活のなかで特殊な地位を要求してはならない。しかもこのことが、民衆のなかのひとりの男の視点から冷静に考察されている。ここでは、カフカの主観的・感情的な自己批判が、現在における芸術の可能性にたいする冷静な考量によってとって代られている。それは、芸術家の存在がいかにして意味あるものとなり得るかという問題に対する、カフカの最終的な態度決定である。即ち、芸術は民衆の生活をし、民衆の労働に服さねばならぬ。それ自体すでにあまりにも困難な、時代に適さぬものとなっている彼の芸術は、そのなかに民衆の声が含まれるかぎりにおいてのみ、ある種の意味を持ち得る。このように、世界に卓絶せる単独者を、現実のなかへ、責任感のなかへひきもどして組みいれることが、カフカの芸術的発展のために全く重要な決定である。そのような意味で、芸術家は、世界には彼のための席は存在しないことを認めなくてはならず、芸術はただ我慢されるだけで、必要なものとして価値を認められないという、カフカの自己批判は、カフカの遺言書に強く反映しているといえる。しかしまた同時にカフカは、現実の直接的な攻撃から彼を守り得たアウトサイダーの位置を断念し、その生命力と行為とが人間らしい生活の基準となる、民衆との連帯性へと決意している。》(Richter, Helmut : Franz Kafka 1962)

K・ヘルムスドルフ《カフカは一九一一年ユダヤの旅役者の一団を通じて、ユダヤ語の脚本や歌や物語を知るにいたり、それに触発されて、チェコ及びユダヤの文学と芸術に関心を持つようになった。このドイツ文学とは本質的にことなっ

た芸術、民族の運命と密接にからみあった芸術に接するにいたって、カフカはそれに関する考察を「群小文学の特性叙述の概要」(Schema zur Charakteristik kleiner Literaturen ―一九一一年十二月二十五日の日記参照)としてまとめた。カフカの考察を要約すれば、〈国民生活における芸術の社会的機能〉ということになるだろうが、その特性をあげた項目のなかに「象徴の平易な表現」とか「通俗性」(Popularität)をあげ、民衆とのつながり、ということを強調している。たしかにカフカは、芸術と社会との有益な結びつきという、芸術のポジティヴな面に眼を向けてはいたのであるが、彼の社会的孤立が、そのためのもろもろの条件を排除していた。彼の創作は別な方向、いわばネガティヴな純粋性という道を歩むことになった。しかし、カフカが、その晩年の作品において、あの「概要」に述べられた思想へと再び近づいていったことも否定できない。民衆というものが、それがどんなに奇妙なかたちであらわれるにしても、カフカの後期の作品では重要な役割をはたしている。》(Weimarer Beiträge 1964-Heft 3, Hermsdorf, Klaus: Künstler und Kunst bei Franz Kafka)

晩年のカフカが、ユダヤの問題と芸術家の問題をきわめて身近に感じていたことは事実である。そしてこれらの問題が作品を解く鍵としてわれわれの眼にうつることもたしかである。しかし、ユダヤと芸術というこのふたつの問題、それは現代のインテリの問題と云ってもよいだろうが、それがこの物語のなかには埋没してしまっている。このようなカフカの作品は、批評家が分析すると、もろもろの問題にくずれてしまう。だから、テキストをその言葉通りに綿密に読みとっていくことが肝心である。

このヨゼフィーネと、彼女のファンと敵対者の物語は、ユダヤ人と芸術家のことをあつかっているだけではなく、なによりもまずはっきりと、ねずみ達とねずみ達の生活のことをあつかっている。だからわれわれは、この物語とともにねずみ達の国に生きている、ということができる。この物語の語り手は、ヨゼフィーネとその一族の史料編纂者の役割を果している。もっとも、かれは「概してわれわれは歴史研究をまったくなおざりにしているが」とことわってはいるが。しかしまた同時に「われわれは歴史にたずさわるものではない」のだから、この

ヨゼフィーネの物語も「この種族の永遠の歴史におけるささやかなエピソード」として忘れさられていくだろうとも云っている。もちろんこのエピソードの寓話的な要素を全然無視することはできない。だからといって、でまかせの思弁をあやつって神学的・哲学的・道徳的な解釈(2)をひきだしたり、現実の模写としてのアレゴリーとして定着できるものではない。カフカの作品は、パズル遊びではないし、一義的な、割りきれた解答を求めてもいない。カフカ自身、ヤヌホとの対話(3)のなかでそのことにふれている。すなわち、アレゴリーは人間の思考のなかでは現実の模写となるが、そこにはすでに混乱があり、部分的見解が全体的見解としてすりかえられる可能性のあることを指摘している。そしてかれは物語というものについて次のように述べている。「われわれユダヤ人は事物を静止せるものとして描写することはできません。われわれは事物をいつも流れている状態で、動きのなかに、つまり変化として見ているのです。われわれは物語作家です。物語作家は物語ることについて話すことはできません。かれは物語るか沈黙するかです。それが全部です。かれの世界がかれの内部で鳴りだすか、あるいは沈黙のなかに沈むかのどちらかです。僕の世界はひびきやみつつあります。僕は燃えつきてしまったのです」この言葉は、多くのカフカ解釈にたいする批判であるばかりではなく、カフカの物語の世界のすぐれたインタープレタチオンとなっている。すべての答えから新たな問いを、すべての定理からそのアンティテーゼを、というカフカの物語のディアレクティックなすすめかたは、固定した麻痺状態への反作用の役割を果たしているのであり、動きのなかにカフカの作品は読みとらるべきである。この弁証法的寓話とでもよばるべきカフカの物語の世界では、なにごとも、時、場所、歴史、地理、さらには神話や宗教の客観的同一物に準拠することがない。素材やモティーフについても、いかなる資料にも由来はなく(4)、かれの書簡や日記もそれをはっきりとは解明してくれない。かれの伝記的資料が、かれに関するでまかせの解釈を是正するのに役立っていることは事実であるが、それをた

だちにカフカの寓話を解く鍵にすることもできない。カフカの寓話は、われわれが、その意味するものが説明できなくても、われわれに感動を与える。それは解釈とか注釈をこえて成功している。ベンヤミンは、『審判』という小説が『掟の門』という寓話を《展開した》ものであると説明したあとで、カフカの寓話について次のように述べている。「この《展開する》という語には二様の意味がある。蕾が開花するときにも、子どもたちがおしえられて作る折紙の舟が一枚の紙に開かれるときも、この語があてはまる。そして、この第二の《展開》が寓話にはもともとふさわしいもので、この寓話を展べひろげて、その意味が明白になるのが読者のたのしみである。ところがカフカの寓話は、第一の意味で解かれるであり、すなわち、蕾が開花するのに似ている。だからその成果は文学にちかづくものである」が、「文学を教訓的なものに移行させ、寓話として文学に堅固さと地味な色調とを回復しようとするかれの壮大な試みは失敗におわっている」と述べ、ここに作品の焼却を命じたカフカの遺言書の真意を見ようとしている。

× × ×

ヨゼフィーネという形象がグロテスクなまでに解体されていくこの作品には、カフカがすべての形象性を破壊しようとする偶像禁止のモラルにつらぬかれた自己否定が支配的ではあるが、また一方では、民衆との「心の通い路」をひらくヨゼフィーネの歌声に、「未熟であると同時に日常的な、慰めを与えると同時に愚かな仲介の世界」を認め、この仲介の世界に唯一の希望を托しているように思われる。そして「われわれの生活はなんともはや惨めなものだけれども、ひそやかな笑いは常にいわば我家にあるようなものだ」という語り手の言葉は、その

ままカフカ自身の生活感情の吐露でもあった。ヨゼフィーネのひとり高らかにひびきわたるちゅうちゅうのなかにも、よるべないねずみ族の生活のなかにも、われわれは、カフカ自身が息づいているのを感ずることができる。

注

① W・エムリッヒはカフカの一連の動物寓話について次のように述べている。《この動物達の示す状況は、人間の有限な経験的表象の世界のヴェールがはがされ、人間存在の全体があらわにされると同時に、その存在の原理的アンティノミーが生きられ、写し出される。すなわち、カフカは読者を、ノルマルな人間社会をふみこえた、ある別の意識と生の段階へと移すのである》

② H・ヘッセ《カフカの物語は、宗教や形而上学や道徳の問題に関する論文ではなくて、文学作品です。ひとりの詩人をほんとうに読む能力のあるひと、知的ないし道徳的な結論を期待することなく、すなおに、詩人の与えるものをすすんで受けいれることのできるひと、このようなひとには、この作品はその語る言葉のなかで、彼の望むすべての解答を用意しています。カフカはわれわれに、神学者としてでも、また哲学者としてでもなく、ただ詩人としてなにかいうべきことがあるのです。彼の文学作品が、こんにち流行をきわめるようになったこと、文学を理解する能力もなく、またその意志もないひとびとによって彼の作品が読まれていること、このことにはカフカはなんの責任もありません。カフカのいちばん初期の作品からずっとその読者のひとりであった僕にとっては、あなたの質問のどれひとつとして意味がないのです。カフカはそれになにも答えてくれません。カフカがわれわれに伝えているのは、かれの孤独な困難な生活の夢や幻想であり、かれのさまざまな体験、かれの苦しみと悦びのための比喩なのです。われわれがカフカに探しもとめ、かれから受けとらねばならぬのは、ただこの夢と幻想であって、明敏な注釈者によってこの文学作品にあたえられる「解釈」ではありません。この「解釈」は一種の知的遊戯であり、それもたいへんこのましい遊戯であることもまれではありません。それは黒人彫刻や十二階音楽に関する書物を読んだり書いたりできる賢いひとびとには有益かもしれませんが、かれらは所詮、芸術には縁のないひとびとで、芸術作品の内奥への通路を発見することはできません。かれらは門のところに立ち、百ほどもあるキーでその錠をためしてはみるが、その門がすでに開いていることにはまったく気づかないのです》これは、ある大学生がヘッセに宛てた手紙のなかで、カフカの『域』『審判』『掟』を宗教的シムボルと考えるかどうか。カフカのユダヤ教に対する関係についてのブーバーの意見には賛成か否か。カフカとパウル・クレーとの親近性を信ずるか否か。——とい

といった質問を提出したのにたいする返答の一部である。(Hesse, Hermann: Gesammelte Schriften, Siebenter Band. — Kafka-Deutungen 1956—)

③ G・ヤヌホ《カフカはG・クロスの線画の一冊をめくりながら云った。「これは資本についての古い考えです—シルク・ハットをかぶった太った男が、貧乏人の金の上に坐っています」「もちろんひとつのアレゴリーにすぎません」「あなたは〈すぎない〉と云われます。アレゴリーは人間の思索のなかでは現実の模写になりますが、それはまちがっています。そこにはすでに混乱があるのです」「それではこの絵はまちがっていると云われるんですね」「かならずしもそうとは云いたくありません。この絵は正しくもあるし、まちがってもいます。この絵が正しいということは、ある方向にむかってだけ云えることです。まちがっているということは、この部分的見解を宣言して全体的見解とする限りにおいて云えることです。シルクハットの太った男が貧乏人の頸ねっこに坐っています。それは正しいのです。しかし、太った男が資本主義である。こうなるともう完全に正しいとは云えません。太った男は、一定の組織自体ではないのです。組織の支配者ですらないのです。反対に、太った男も、絵には描かれていない拘束にしばられています。この絵は完全ではありません。ですからよくないのです。資本主義は、内から外へ、外から内へ、上から下へ、下から上へいく隷属組織です。すべてのものは隷属しています。すべてのものは、拘束されています。資本主義は、世界と魂とのひとつの状態です》(Janouch, Gustav: Gespräch mit Kafka 1952)

④ W・エムリッヒは《ボヘミヤ地方の民族説話では「ねずみは自ら歌うばかりでなく、美しい音楽によって群をなしておびきよせられ、悪しき音楽によって駆逐される。下手な歌手にむかっては—お前の歌はすべてのねずみを家から追い払う—と云われる。そのうえ、口笛によって、ねずみどもを家から外へ、また家の中へおびきよせることのできる人がいる」と信じられている。おとぎばなし、伝説、神話にたいへん興味をもっていたカフカは、このことをJ・V・グローマンの著書によって知っていたと思われる》と書いている。

その他の文献

Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes, S. Fischer.

Kafka, Franz: Tagebücher 1910–1923, S. Fischer.

Benjamin, Walter: Franz Kafka, zur 10. Wiederkehr seines Todestages, in: Schriften, Bd. 2. 1955.